

平成26年度 第7回企画展(1月10日(土)～3月1日(日))

# 近代の常滑焼

近代といわれる明治から昭和戦前期までの時期に作られた常滑焼は、近代産業として、土管の生産とともに、海外への輸出品や釉薬を施した陶器の生産が一般に行われるようになるのが特徴です。

常滑の近代土管は明治5年から始まります。近代土管の製法を確立したのは鯉江方寿(こいえほうじゅ)でした。土管は江戸時代後半の19世紀には生産が始まっています。江戸時代は土管を『土樋(どひ)、水門(すいも)、いたちくぐり』などと呼んでいます。江戸時代の土管は甕や壺と同様に「ヨリコ」と呼ばれる紐作りによって作られていました。明治6年以降の近代土管は木型の使用とソケット(受け口)部分を改良することで、製品の規格化と大量生産に成功します。今回の展示にある近代土管はソケット部分に「有効貳等賞 日本愛知縣 知多常滑村 鯉江高司製」の刻印があります。鯉江高司は方寿の後継者です。

鯉江方寿のおこなった業績は近代土管の製法だけでなく、新田開発や便器の開発があります。明治21年に方寿によって専売特許が取得された「厠器(かわやき)」は、腰掛け式で、西洋風の便器として考案されたと考えられます。形は和式便器をそのまま底上げしたもので、※交趾(こうち)風の釉薬が施されており、当時としては画期的でしたが、まったく普及しませんでした。

明治20年代になると常滑でも輸出事業が軌道にのり、様々な製品が生み出されました。特に朱泥龍巻(しゅでいりゅうまき)はカナダやアメリカを中心にヨーロッパにも輸出され一世を風靡しました。この龍巻は初代山田常山(やまだじょうざん)も制作していたことがわかっています。

大正時代になるとロッキングラム土瓶と呼ばれるティーポットが試作され、戦前戦後にかけて輸出用の製品として大量に生産されました。ロッキングラムとはイギリスの侯爵の名前で、ヨーク州のスウィントンで焼かれた陶器のことをロッキングラム・ウェアと言います。

大正時代に常滑で焼かれたタイル・テラコッタは、フランク・ロイド・ライトが設計した帝国ホテルで採用されました。これをきっかけに常滑の高い技術が評価され、さらに生産が増大していきました。青空が黒々とすすけるほど休みなく焼き物が焼かれた当時、近代日本の都市建設を支えた常滑の焼き物の隆盛ぶりを今も私たちに語りかけてきます。

※交趾焼…明代末～清の時代に中国南部で焼かれた色彩のある施釉陶器

とこなめ陶の森 資料館